

育児不安研究の現状と課題

吉田弘道¹

The review of research of parenting anxiety and the issue

Hiromichi Yoshida

Abstract: これまでに行われている育児不安研究を概観し、育児不安の定義、育児不安の尺度、育児不安の要因について論じるとともに、それぞれの課題について検討した。すなわち、定義については、育児不安としては確立されつつあるが、育児ストレスとの区別が難しいこと、そのことが育児不安の測定尺度の問題として残されていることを述べた。また尺度の問題としては、育てている子どもの年齢の異なる母親について同じ項目を用いて測定することについて疑問があることを述べた。要因研究に関しては、要因相互の関係をみながら育児不安への影響を検証している研究がみられないことを述べた。以上の課題を検討することにより、今後育児不安研究は発展していくことが考えられる。

Keywords: 育児不安研究の課題、育児不安の定義、育児不安の測定、育児不安の要因

育児不安に関する研究は、1980年代から始まり、育児不安の要因についても、いくつかの研究がこれまでに進行してきている。研究が始まってからすでに30年ほど経過していることになる。しかし、この研究領域ではまだいくつかの課題が残されている。例えば育児不安の定義は研究者によりさまざまであるため研究対象としている内容が一致していない面がある。この影響は、研究に使われている育児不安の測定尺度の不確かさにも及んでいる。さらに育児不安の要因についても、まだ十分に解明されているとはいえない。そこで、本論文では、これまでに行われている育児不安研究を概観するとともに、育児不安研究において残されている課題を整理し、今後の研究の発展性について検討することにしたい。

育児不安の定義

わが国では、子育てに悩む母親の問題が社会的関心を集めることが多くなった1980年代から、育児不安の研究が盛んに行われている。これらの研究では、育児不安の概念はそれぞれの研究者によって幾分異なっている。大別すると、①子どもの授乳や睡眠、排泄等に関する具体的な心配事としてとらえる立場（鈴木，1980）、②育児にまつわるストレスとしてとらえる立場（佐藤・菅原・戸田・島・北島 1994；田中・難波，1997；手島・原口，2003）、③育児に限らず家事や生活の総体から産み出される母親の生活ストレスとしてとらえる立場（諏訪・戸田・堀内，1998）、そして④母親が育児に関して感じる疲労感、育児意欲の低下、育児困難感・不安とし

てとらえる立場（牧野，1982；牧野・中西，1985；川井・庄司・千賀・加藤・中野・恒次，1996；Yoshida, Yamanaka, Khono, Ota, Nakamura, Yamaguchi, & Ushijima, 1999；吉田・山中・太田・巷野・山口・中村・牛島，1999a, b；住田・中田，1999），である。①の、子どもの授乳や睡眠、排泄等に関する具体的な心配事としてとらえる立場は、研究の初期に見られる。この考え方はわかりやすいのであるが、具体的な対処の仕方がわかれば解消される不安であるので、長期的に続く不安としてはとらえにくいといえる。

②の、育児にまつわるストレスとしてとらえる立場は、ストレス反応と育児不安を同類として扱っている。確かにこの二つの区別は明確になされておらず、育児不安はストレス反応と同じなのか、それともストレス反応の一側面であるのかについて考えると、その区別の難しさがわかる。この立場に立つ研究者としては、世界でよく使われている育児ストレス尺度を開発したAbidin (1995) がいる。海外の研究には、我が国で言われているような「育児不安」(parenting anxiety) の用語はなく、育児ストレス (parenting stress) が主である。ちなみに、Fink が編集責任を務めたストレス事典 (Fink, 2007) の中で「育児ストレス」は、「親であることに伴い要求されることに由来する、ネガティブな心理的・生理的反応パターン」と定義されている。また、近年行われている育児ストレス研究 (例えば、Molfese, Rudasill, Beswick, Jacobi-Vessel, Ferguson & White, 2010) でも Abidin (1995) の概念を踏襲し、彼のストレス尺度を用いている。ストレスについて多くの研究を行っている Lazarus (1999) は、ストレスと情動との関係について論じたなかで、ストレスは情動を含むと述べてい

受稿日2011年10月30日 受理日2011年11月2日

1 専修大学人間科学部心理学科 (Department of Psychology, Senshu University)

表1 牧野（1982）の育児不安尺度

群	項目
I群：一般的疲労感	毎日くたくたに疲れる 朝、目覚めがさわやかである
II群：一般的気力の低下	考えごとがおっくうでいやになる 毎日はりつめた緊張感がある
III群：イライラの状態	生活の中にゆとりを感じる 子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう
IV群：育児不安徴候	自分は子どもをうまく育てていると思う 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある 子どもは結構一人で育っていくものだと思う 子どもをおいて外出するのは、心配で仕方がない
V群：育児意欲の低下	自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう 育児によって自分が成長していると感じられる 毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う

* 「よくある」から「全くない」までの4件法

る。これに従うと、不安はストレスに含まれる情動反応であり、ストレス反応の一側面であると読める。さらに、Lazarusは、ストレスと情動は相互依存しており、ストレスと情動を、別の分野として取り扱うことはできない、とも述べている。しかし、ストレスと情動が同じであるとは述べていない。さらに、ストレスが高いことがストレス反応が高いことであるとも述べていない。このことは、後述する尺度の問題とも関連してくる。

③の、育児に限らず家事や生活の総体から産み出される母親の生活ストレスとしてとらえる立場は、②の立場と似ているが、育児に限らず、生活の総体から生まれるストレスとする点で異なっている。このように生活の総体から生まれるストレスとしてとらえる立場については、生活全般のストレスまで拡大することは、育児をする母親を全体的に見ることにつながる利点があるが、一方では、子育てとは違うストレスを対象としてとらえてしまう欠点もあると考えられる。

④の、母親が育児に関して感じる疲労感、育児意欲の低下、育児困難感・不安としてとらえる立場は、①や②③に比べると比較的母親の実態に即しているといえる。例えば、家族社会学の観点からいち早く育児不安研究に着手した牧野（1982）は、育児不安を、育児行為の中で一時的に生じる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態。子どもの現状や将来、あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態としてとらえている。またさらに、育児に関する不安徴候として、一般的疲労感、一般的気力の低下、イライラの状態、育児不安徴候、育児意欲の低下として明確化して

いる。同じく、育児不安研究に取り組んだ社会学者の住田・中田（1999）も、育児不安を、育児ないし育児行為から喚起される漠然とした恐れ of 感情とし、その内容を、育児に関する一般的な不安感情、子どもの成長・発達に関する不安、母親自身の育児能力に関する不安、育児負担感・育児束縛感による不安、と明確にしている。川井ら（1996）は、母親としての不適格感、育児に対する不安、自信のなさ、負担感からなる育児困難感が育児不安の本態であるとしている。筆者ら（Yoshida et al., 1999；吉田他, 1999a, b）も育児不安を、育児に伴う自信のなさや不安、子どもとかわるごとの疲労感、子育てからの逃避願望、育児による社会からの孤立感などとしてとらえている。

以上述べたように、育児不安には定義の問題が残されていることになる。このことは、次に述べる育児不安の測定方法、測定尺度の問題にも波及し、育児不安研究にも影響を与えることになる。

育児不安の測定方法

育児不安尺度

育児不安の測定方法としては、大別すると二つある。一つは、育児不安に関係した項目を選択して構成したアンケートを用いる方法であり、もう一つは育児ストレス尺度を用いる方法である。前者はその後尺度としての形をなし、妥当性や信頼性、得点の内的整合性の信頼性を確認したものへと発展している。

牧野（1982）は5群、14項目からなり、4件法で評定をを求めるアンケートを用いている（表1）。これは「育児不安尺度」と名づけられているが、各群の項目数が少

表2 育てている子どもの月齢による項目得点の違い (Yoshida et al, 1999)

項目	分散分析 F 値	ポストホック検定の結果
子育ては自分には合っていないので早く好きなことをしたいと思う	6.303***	b<c*, c<d*, d<e*
毎日生活していて心に張りを感じられない	10.829***	a<b*, b<c*, c<d*, d>e*
ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする	8.449***	a<b*, b<c*, c<d*, d<e*
子どもを育てていて自分だけが苦勞していると思う	4.212***	a<b*, b<c*, d<e*
何か心が満たされず空虚である	10.708***	a<b*, b<c*, c>d*, c<e:*, d<e*
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある	9.554***	a<b*, b<c*, c<d*, d<e*
一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込むことがある	5.568***	a<b*, b<c*
体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする	1.14	
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思うことがある	8.090***	a<b*, b<c*, c<d*, c<e*, b<d*, b<e*
育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある	7.827***	a<b*, b<c*, c>d*, c<e*

a: 1~2か月 N=296, b: 4~5か月 N=295, c: 10~11か月 N=264

d: 17~19か月 N=267 e: 24~35か月 N=140

*p<.005; **p<.001; ***p<.0001

なく、また因子分析によって統計的に構造が確認されたものではない。その点では尺度としての信頼性は低いといえる。しかし、項目内容は育児不安としては妥当であり、研究の初期のものとしての存在意義は高いといえる。その後、育児不安研究によく用いられているのが、田中(1994)の育児不安尺度である。この尺度は、牧野(1982)の尺度と佐々木・高梨・本郷(1991)の育児不安尺度から項目を選択して構成されているものである。1因子10項目から構成されており、妥当性や信頼性について確認されている。育児不安の項目としてもわかりやすいためか、興石(2002a, b, c)や原田・松浦・矢倉・佐々木・笠置(2005)の研究に用いられている。ただ、田中の尺度は、幼児期の子どもを育てている母親を対象として作られているために、1歳児を育てている母親から6歳児を育てている母親までの資料を一緒にして分析されている。この点に関しては以下の点で疑問が残る。

筆者は育児不安尺度の作成研究の一環として、異なる月齢の子どもを育てている母親を対象に、月齢群ごとに育児不安の項目の因子分析を行うとともに、異なる年齢群で共通して選択された項目を用いて育児不安を測定した場合に、項目得点にどのような違いがあるのかについて検討したことがある(Yoshida et al., 1999)。対象は、1~2か月、4~5か月、10~11か月、17~19か月、24~35か月、それぞれの月齢の乳幼児を育てている母親6

群、延べ1400名であった。まず因子分析の結果は、対象群によって育児不安因子に含まれる項目が幾分異なることが明らかになった。さらに、6群に共通して含まれている10項目それぞれの得点の平均値について年齢群間で比較したところ、有意差があることが判明した。すなわち、得点の平均値が1~2か月よりも4~5か月群の方が高い項目が10項目中7項目あり、2歳群がそれ以外の群よりも高い項目が6項目あったのである。他にも群間の違いがみられた(表2)。以上の結果から考えると、育てている子どもの月齢によって、母親が育児不安として認識する項目が異なり、そして、子どもの月齢が高くなると育児不安は軽くなるというよりも、反対に高くなる可能性があるのである。もちろん、調べる項目によっては、これとは異なる結果が得られることも考えられる。このように考えると、月齢の幅が広い子どもを育てている母親を対象として開発された尺度には、月齢によっては適さない項目や、反応が月齢の違いによって変動する項目が含まれている可能性があることになる。換言するならば、適さない物差しを用いて研究を行っているということもできる。これは大きな課題であり、研究者は、用いる尺度の限界を認識しておく必要があるといえる。この点を解決することを考えて筆者らは、これまでに、1・2か月児用(吉田他, 1999a)、4か月児用(吉田・山中・太田・巷野・山口・中村・牛島, 1998)、1歳半児用(吉田他, 1999b)を作成している。川井らも

子どもの年齢を考慮して、0～11か月児用、1歳児用、2歳児用、3～6歳児用の4種類の尺度を作成している（日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所，1999）。川井らのこのような試みは評価できるが、変化の大きい0歳児の時期を一つの尺度で測定することについては不満が残る。

ストレス尺度

育児ストレスとして測定する方法は、ストレスへの回答を求め、その多い少ないを反映させて、それをストレスの高低と判断する方法と、ストレス反応への回答を求める方法がある。手島・原口（2003）の作成した「育児ストレス質問紙」の中の「育児ストレス尺度」と、田中・難波（1997）の「育児ストレス尺度」は子ども側の特徴からなるストレス項目で構成されている。このことは、「育児ストレス」といいながら子どもの育てにくさの程度を測定していることになる。すなわち、ストレス反応ではなくストレスの程度を測定しているのである。この方法を妥当であるとするためには、「ストレス」イコール「ストレス反応」と考えなければならないが、両者はイコールではない。この点疑問が残ることになる。

一方佐藤ら（1994）が作成して用いたストレス尺度は、子どもの特徴からなるストレス項目と親側のストレス反応項目から構成されている。Abidin（1995）が開発した育児ストレス尺度（parenting stress index）も、子どもの特徴からなるストレス項目と親側のストレス反応項目から構成されている。この尺度は、多くの国で翻訳されて使われており、わが国でも日本版が作成されている（奈良間・兼松・荒木・丸・武田・白畑・工藤，1999）。これらの尺度は、子どもの特徴からなるストレス因子と親側のストレス反応因子の得点を合計して育児ストレスを評定するが、別々に評定することもできる。筆者としては、ストレスの程度はストレス反応の程度と同等ではないと考えるので、別々に評定した方がよいと考えている。なお、育児ストレスとして、ストレスに対する回答を得て測定している研究の中には、0か月よりも3か月の方が、ストレスが軽くなるなどの結果を得ているものもある（難波・田中，1999）。しかし、これは子どもの育て方がわかるようになってくることを反映して、ストレスが低くなることを表しているだけなのかもしれない。

尺度の使用について

以上述べたように、育児不安尺度にしても、ストレス尺度にしても、その尺度の有効性もあるが限界もある。このことを考慮すると、尺度を使う際にどのような目的で尺度を使うのかについて考えておく必要がある。尺度の使用目的については、研究目的と臨床目的に大別できる。研究目的であれば、実際に対象者に迷惑を与える危険性は少ないといえるが、研究の信頼性が問われることとなる。従って、その尺度の妥当性と信頼性が統計的に確認されているだけでは十分ではなく、その尺度の理論的背景と作成過程における対象選択と分析手続きの妥当性を踏まえた上で、尺度の精度が検証されていることが課題となる。一方、臨床目的で尺度を用いる場合には、測定する対象者に迷惑を与える可能性は高くなる。そのために、対象者の特質に合致した尺度を作成して用いることが課題となる。川井らの尺度（日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所，1999）と筆者らの育児不安尺度（吉田他，1998；1999a, b）は対象者の特質を考慮して、育てている子どもの年齢別に細かい尺度を作成するとともに、不安の高さを段階別に整理し、不安の高い母親に臨床的に対応することを試みている。川井らの尺度は、統計的には上位10%程度をスクリーニングポイントと考えている（川井・庄司・千賀・加賀・中村・恒次，1997）。筆者らが作成した尺度では、育児不安が最も高い第5段階の割合は1・2か月児用15.8%、1歳半児用18.4%としている（吉田他，1999a, b）。筆者らの尺度で「不安が高い」と評定される割合が少し高いように感じられるが、エジンバラ産後うつ病自己評価票を使っている調査では、3・4か月健診でうつの基準値を超えていた母親の割合は13.9%だったとする報告もある（Nishizono-Maher, Kishimoto, Yoshida, Urayama, Miyata, Otsuka, & Matsui, 2004）ので、評定基準が甘すぎるということもないと考えている。ただ、川井らや筆者らの作成した尺度は、不安が高いとする評定基準を統計上の計算によって導き出したものであるため、尺度の有効性を実際に育児不安の高い母親と対応させて臨床的に確認する作業が残されているといえる。

育児不安の要因

育児不安の要因に関する研究はこれまでに数多く行われており、その要因が明らかになってきている。要因を分類すると、母親側の特徴、子ども側の特徴、家族関係・夫婦関係、社会的サポートの4つが挙げられる（表3）。

表3 育児不安の要因

分類	内容
母親側の特徴	年齢 職業の有無・職業観 性役割分業意識 生活の充実感・趣味の有無 理想と現実の認識 自己注目傾向
子ども側の特徴	子どもの気質・育てやすさ 子どもの数
家族関係	核家族・複合家族 夫婦関係・夫婦の会話 夫のサポート
ソーシャル・サポート	友人 社会的サポート 近所づきあい・家族以外の人との会話

母親側の要因

母親の年齢については、育児不安への影響がないと報告されている（牧野，1982）。職業の有無に関しても、育児不安の高さに違いがないと報告されている（牧野，1982）。しかし、その後の研究では、仕事を持っている母親の方の育児不安が低いことが確認されている（牧野・中西，1985）。また仕事をする 것과母親の生き方志向を絡めると、結果は複雑である。例えば、牧野（1982）は、性別役割分業意識では育児不安の程度に違いがないとしながらも、職業観によって育児不安に違いがみられ、仕事を持つことに対して積極的な考えをもっている母の方が育児不安が低かったとしている。これに対して原田ら（2005）は、社会人・職業人としての自分について、現実的な見方と理想的な見方との両面からとらえた場合、とらえ方にしても、現実と理想とのギャップの大きさにしても、育児不安には違いが見られなかったとしている。ところで、これらの生き方志向は毎日の生活の充実度とも関係していると思われるが、牧野（1982）によると、生活の充実感・幸福感を感じている母親、あるいは趣味を持っている母親の方が、そうでない母親と比べて育児不安が低いということである。また、子どもから離れてしたいことができていると感じている母親は育児不安が低い、子どもだけが生きがいであると考え、子どもとの心理的距離が近い母親ほど育児不安が高いことも明らかにされている。

このほかにも、母親の個人的性格特徴と関係して研究が行われている。例えば、自己注目傾向と育児不安との

関係については、自己注目傾向の高いことが育児不安に影響していること（興石，2002a）、また自己注目傾向の高い母親は、過敏性が高い気質特徴をもっている乳児を育てている場合に育児不安が高いが、自己注目傾向が低い母親の場合には、育児不安との間に相関がみられないことが報告されている（興石，2002b）。抑うつ傾向を育児不安の要因の一つとして挙げている研究もある（川井・庄司・千賀・加賀・中村・谷口・恒次・安藤，1998）。しかし、育児不安と抑うつ傾向を同時に測定しているため、抑うつ傾向が結果である可能性も考えられるので、要因であるかどうかは不明であるといえる。同じことは、特性不安との関係でもいえる。筆者らの研究では、育児不安尺度の妥当性を調べるためにSTAIを用いた（Yoshida et al., 1999；吉田他，1999a, b）。その結果では、育児不安の高さと、状態不安および特性不安の得点との間に有意な正の相関が見出されたが、この結果を、状態不安の高さが育児不安の要因の一つであると認識しなかった。それは、両者を不安反応であると考えたからである。特性不安が育児不安の要因の一つであることもできるが、STAIの特性不安と状態不安の相関はもともと高く、特性不安が本来の不安傾向を反映しているのか明らかにできなかったため、要因として考えなかった。ここに検討した点を考えると、妊娠中の母親の自尊感情および心配性傾向と、乳児期の育児不安との関連を調べた興石（2002c）の研究は意義がある。すなわち、妊娠中の二つの特徴と、乳児期の育児不安との間に相関関係が確認されたのである。

子ども側の特徴

子どもの気質に関しては、これまでに育児ストレス尺度のところでも述べたように、育児不安との関係が注目されている。武井・寺崎・門田(2006)は、子どもの気質のうち「否定的感情反応」が育児不安と関連していることを報告している。すなわち、母親が子どもを育てにくいと感じる子どものネガティブな感情表出の多さが、育児不安と関連しているといえる。

子どもの特徴ではないが、子どもの数も育児不安に関しては子ども側の要素として考えられる。牧野(1982)は、子どもの数によって育児不安に違いはなかったとしている。しかし、筆者らが調べたところ、二人目の子どもを育てている母親の方が一人の子どもを育てている母親よりも育児不安は高かった(吉田・山中・太田・巻野・山口・牛島, 2001)。これには、二人目の子どもを育てている母親の場合、父親との会話が少ないことが影響していた。これについては、一人の子どもを育てている父親よりも二人以上の子どもがいる父親の方が年齢が高く、仕事の忙しさにより夫婦の会話が減っていることが影響しているのではないかということが予想された。

家族関係・夫婦関係

家族形態の違いによる育児不安については、その影響はないとする報告がある(牧野, 1982)。しかし、その後育児不安の家族形態による違いを明らかにした研究はない。これについては、核家族が多くなっているために、比較研究が難しくなっているのではないかと予想される。ところで、核家族が多くなると、父親の役割が重要になる。これまでに、父親が育児に参加するかどうか、夫婦の会話が多いかどうかという夫婦関係が母親の育児不安研究では扱われている。それによると、父親が子育てに参加することが多いかどうか、あるいは、父親が子どもと接する時間が長いかどうかは育児不安とは関係しないことが明らかになっている(牧野, 1982; 牧野・中西, 1985; 住田・中田, 1999)。それに対して、父親が子育てに責任を感じていると母親が思っている場合(牧野, 1982)、父親の育児への分担意識を母親が好意的に受けとめている場合(牧野・中西, 1985)、そして夫婦の会話が多き場合(牧野, 1982; 住田・中田, 1999)に育児不安が低いことが明らかになっている。なお、夫婦の会話に関しては、夫婦のコミュニケーションにおいて、表現的なスキルが高い母親は父親からのサポートを多く受けており、さらに、夫婦のコミュニケーションを母親がコントロールできている場合に、育児不

安が低いとする報告もある(石・桂田, 2006)。

ソーシャル・サポート

家族以外のサポートも重要であると考えられる。近所づきあいの多い母親、家族以外の人との会話が多い母親は育児不安が低いことが確認されている(牧野, 1982)。また地域のサポートとして、子育ての専門家によるサポートや、子どもが遊べる場所や母親同士が話せる環境があるサポートがある場合には育児不安が低いことも報告されている(手島・原口, 2003)。

要因研究における課題

以上のように、要因研究はかなり行われている。ところが、これまでの研究では、育児不安と要因との関係を相関分析や回帰分析によって見ているものはあるが、いくつかの要因の相互関係の中で育児不安への影響を検討している研究は見られない。また、育児不安と母親の性格特徴を同時に測定して検討しているものが多く、性格特徴が基盤になっているのかどうかを確認するのが難しい。さらに、要因としては、サポートの影響を確認する研究が少ない。また、他に要因として考えられるものとしては子育ての準備期における親教育があるが、その効果研究が行われていない。以上が要因研究における課題であるといえる。

結語

本論文では、育児不安研究の現状について概観するとともに、課題について検討した。まず育児不安の定義における混乱は、育児ストレスとの関係以外の点では整理されてきているものと考えられる。ただ、育児不安と育児ストレスの区別の不明瞭さは残り、そのことが尺度の作成と、測定に影響を与え続けている。さらに、育児ストレスに関しては、ストレスの測定とストレス反応の測定が同類として扱われているため、尺度を使う場合に注意が必要であるといえる。ただ、このことは育児ストレス研究だけの課題ではなく、広くストレス研究の課題といえる可能性がある。さらに、尺度に関しては、育てている子どもの年齢が異なる母親の資料を一緒に分析して作成したものが用いられているという課題がある。この点は、対象に適した尺度を開発することによって、解決することができる。育児不安の要因に関しては、もっと研究を深めることができる余地が残されているといえる。以上述べた点をより明確にしていくことにより、今後育児不安研究はさらに発展していくものと考えている。

引用文献

- Abidin, R. R. (1995). *Parenting stress index*. 3rd ed. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources Inc.
- Fink, G. (2007). *Encyclopedia of stress*. 2nd ed. Burlington: Elsevier. (ストレス百科事典翻訳刊行委員会 (訳編) (2009). ストレス百科事典 丸善)
- 原田由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清 (2005). 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連 小児保健研究, **64**, 265-271.
- 石 暁玲・桂田恵美子 (2006). 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討: 乳幼児をもつ母親を対象とした実証的研究 母性衛生, **47**, 222-229.
- 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也 (1996). 育児不安に関する臨床的研究2——育児不安の本態としての育児困難感について 日本総合愛育研究紀要, **32**, 29-47.
- 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加賀博仁・中村 敬・恒次欽也 (1997). 育児不安に関する臨床的研究Ⅲ——育児困難感アセスメント作成の試み 日本総合愛育研究所紀要, **33**, 35-56.
- 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加賀博仁・中村 敬・谷口利加子・恒次欽也・安藤朗子 (1998). 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ——育児困難感のプロフィールの評定試案 日本総合愛育研究所紀要, **34**, 93-111.
- 子ども家庭総合研究所・愛育相談所 (編著) (1999). 子ども総研式・育児支質問紙手引き 子ども家庭総合研究所・愛育相談所
- 興石 薫 (2002a). 母親の自己注目傾向と育児不安について 小児保健研究, **61**, 475-481.
- 興石 薫 (2002b). 新生児期から生後4か月までの子どもの気質の安定性と母親の育児不安——母親の自己注目傾向の違いから 小児保健研究, **61**, 482-488.
- 興石 薫 (2002c). 育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究——よき不安尺度と期待感尺度の作成 小児保健研究, **61**, 686-691.
- Lazarus, R. S. (1999). *Stress and emotion, A new synthesis*. New York: Springer. (本明 寛 (監訳) (2004). ストレスと情動の心理学, ナラティブ研究の視点から 実務教育出版)
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安> 家庭教育研究所紀要, **3**, 34-56.
- 牧野カツコ・中西雪夫 (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連 家庭教育研究所紀要, **6**, 11-24.
- Molfese, V. J., Rudasill, K. M., Beswick, J. L., Jacobi-Vessel, J. L., Ferguson, M. C., & White, J. M. (2010). Infant temperament, maternal personality, and parenting stress as contributors to infant developmental outcomes. *Merrill-Palmer Quarterly*, **56**, 49-79.
- 難波茂美・田中宏二 (1999). サポートと対人葛藤が育児期の母親のストレス反応に及ぼす影響 健康心理学研究, **12**, 37-47.
- 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸 光恵・武田淳子・白畑範子・工藤美子 (1999). 日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討 小児保健研究, **58**, 610-616.
- Nishizono-Maher, A., Kishimoto, J., Yoshida, H., Urayama, K., Miyata, M., Otsuka, Y., & Matsui, H. (2004). The role of self-report questionnaire in the screening of postnatal depression: A community sample survey in central Tokyo. *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology*, **39**, 185-190.
- 佐々木保行・高梨一彦・本郷一夫 (1991). 母親の Child Rearing Burnout に関する基礎的研究 (第2報) 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), **6**, 273-282
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北島俊則 (1994). 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, **6**, 409-416.
- 住田正樹・中田周作 (1999). 父親の育児態度と母親の育児不安 九州大学大学院教育学コース院生論文集, **2**, 19-38.
- 鈴木淑子 (1980). 3か月児を持つ母親の育児不安について 小児保健研究, **38**, 493-499.
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる (編著) (1998). 母親の育児ストレスと保育サポート 川島書店
- 武井祐子・寺崎正治・門田昌子 (2006). 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, **16**, 221-227.
- 田中昭夫 (1994). 保育園児の母親への育児支援に関する基礎的研究——その蓄積的疲労徴候と育児不安を軽減するために 保育学研究, **32**, 107-115.
- 田中宏二・難波茂美 (1997). 育児ストレス尺度の作成 岡山大学教育学部研究集録, **106**, 179-183.
- 手島聖子・原口雅浩 (2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援: 育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要, **1**, 15-27.
- 吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・中村孝・牛島廣治 (1998). 育児不安尺度の作成に関する研究 その2: 4か月児の母親用育児不安尺度のモデルについて 第45回日本小児保健学会論文集, 130-131.
- Yoshida, H., Yamanaka, T., Khono, G., Ota, Y., Nakamura, T., Yamaguchi, K., Ushijima, H. (1999). Differences in anxiety variables of mothers rearing firstborn infants: A pilot study of the maternal anxiety screening scale. In M. Matsushita & I. Fukunishi (Eds.), *Cutting edge medicine and liaison psychiatry. Psychiatric problems of organ transplantation, cancer, HIV/AIDS and genetic Therapy*. Amsterdam: Elsevier Science. pp. 193-202.
- 吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・中村孝・牛島廣治 (1999a). 育児不安尺度の作成に関する研究——1・2か月児の母親用試作モデルの検討 小児保

健研究, **58**, 697-704.

吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・中村孝・牛島廣治 (1999b). 育児不安尺度の作成に関する研究 1歳半児の母親用試作モデルの検討 チャイルドヘ

ルス, **2**, 139-143.

吉田弘道・山中龍宏・太田百合子・巷野悟郎・山口規容子・牛島廣治 (2001). 2人目の子どもを育てている母親は育児不安が軽いか チャイルドヘルス, **4**, 766-769.